

「研究テーマ」

探究Ⅰ 熟議によるキャリア教育の推進と言語運用能力の 向上・科学的リテラシーの育成

兵庫県立三田祥雲館高等学校 校長 高橋 敬介
教諭 吉野 哲生

1 はじめに

本校は全日制による単位制普通科の高等学校として、平成14年4月に開校した。単位制とは、平たく言えば、生徒一人一人が自分の学習内容をデザインして履修科目を選択し、自分オリジナルの時間割を作り、進路実現を目指して勉強に取り組むシステムである。

単位制が本校教育活動の一つの柱だとすれば、開校当初より学校全体で取り組んでいる「探究活動」がもう一つの柱である。生徒たちが自らの興味・関心や進路希望に応じてテーマを設定し、グループ研究や個人研究を通して問題解決能力を身に付ける、本校独自の学習プログラムである。1年次では週に1時間（「探究Ⅰ」）、2年次・3年次では週に2時間を探究活動に配当している。

この学習プログラムを通して、研究テーマの内容理解を深めると同時に、生涯にわたって活用できる「学び方」を学ぶことを目標としている。具体的には、新学習指導要領が発表される以前より「言語力」の重要性に着目し、「言語運用能力の向上」と「科学的リテラシーの育成」を目指している。また、この学習を通じて、自己の将来を社会との関係性の中で捉え直し、キャリア意識を育てることに主眼を置いている。

本校では前年度に引き続き、活字で書かれた情報コンテンツを活用して社会に対する認

識や知識を充実させるとともに、批判的・客観的に読むことを通して「言語運用能力」と「科学的リテラシー」を涵養できる教材として、新聞を活用した。以下に、取り組みの概要を記すとともに、今後の課題を付記して、本年度の実践報告としたい。

2 新聞活用のための「探究Ⅰ」年間計画

「探究Ⅰ」は1年次生全員がHR単位で学習する、本校の「総合的な学習の時間」の一部である。1年次の7クラスに2人ずつ担当者を配置し、計14人の教員が授業を担当する。担当者が各クラスの様子や学習への取り組みの状況等を把握しながら、ある程度学習内容への裁量を持って授業づくりができるよう、下記のような指導目標を設定した。

目 標

- 1 現代社会の諸課題について幅広く関心を持ち、それらの課題を自己の課題と関連付けて探究する意欲と自分なりのものの見方や考え方を育てるとともに、他者や社会・自然との関わりの中に自己を位置付け、社会の形成に参画するという観点から、自分自身の在り方・生き方を考察させる。
- 2 現代社会の諸課題を適切に理解し、それについての教員と生徒や生徒同士の対話

や熟議を通して、多面的に物事を捉えたり、深く考察する力を涵養するとともに、それらを論理的に表現することを通して、言語運用能力と科学的リテラシーの向上を図り、優れた問題解決能力を身に付けさせる。

目標1は学習の「コンテンツ（内容知）」に関する目標である。

高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（以下、指導要領総合学習編）によると、高校生は「自分の人生をどのように生きればよいか、生きるの意味は何かということについて思い悩む時期である。また、自分自身や自己と他者の関係、さらには広く国家や社会について強い関心をもち、人間や社会のあるべき姿について考えを深める時期でもある。それらを模索する中で、生きる主体としての自己を確立し、自らの人生観、世界観ないし価値観など、自分なりの種々のものの見方や考え方を形成し、主体性を持って生きたいという意欲を高めていく」発達段階にある。

このような認識の下、本校では従前より、自然科学的な諸現象を含む広義の社会現象や学問的業績の一端に触れることを重視してきた。探究Ⅰにおいてもこれを継承し、社会で起こる諸課題に対する学習を進め、考え方や認識を深めることとする。これは、上記の発達段階にある高校生にとって重要な経験となる。また、この活動を通して社会の中に自己を位置付け、自己の在り方・生き方を主体的に考えさせることが期待される。

目標2は学習の「スキル（方法知）」に関する目標である。

本校の探究活動では、身に付けさせるスキルを「言語運用能力」と「科学的リテラシー」に大別する。

探究活動を充実させ、学習を深化させるには論理的かつ客観的に文章を読み解いたり、記述したりすることが重要である。また、学習を進めていく過程で、教師と生徒や生徒同士が対話したり、熟議することで育つコミュニケーション力も身に付けさせるべき大切な力となる。本校ではこれらを総合して「言語運用能力」と呼び、これらを総体として高めさせることを目標とする。この力を育成することは、新学習指導要領の柱ともなっており、文理を問わず諸学の基礎として重要な能力である。また、本校が開校以来取り組んでいる探究活動の成果を発展させるために欠かせない事柄となっている。

「科学的リテラシー」とは、小倉康氏（国立教育政策研究所総括研究官、JST理科教育支援センターシニアアナリスト）によると、

①疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とそれを活用する力

②人間の知識と探究の一形態として科学的な考え方を理解する力

③科学と技術がわれわれの物質的、知的、文化的環境をいかに形づくっているかを認識する力

④思慮深い一市民として、科学的な考えを持ち、科学が関連する諸問題に、自ら進んでかかわる力

と定義される。客観性の高い文章を読み解い

たり、データ等を活用する中で、これらの力を養成することが重要である。また、これらは内容は内容知としても身に付けさせることが求められる。

「スキル（方法知）」は「コンテンツ（内容知）」を追究する過程でしか育たず、「コンテンツ（内容知）」は「スキル（方法知）」の熟達なくしては深まらない。双方を有機的に関連付け、相乗的に発展させることが指導上の大きなポイントとなる。

3 授業づくりの基本方針

(1) 「新聞記事」の位置付け

「新聞記事」は、本校独自の学びを深める中心的な教材と位置付けて活用した。つまり、「新聞を学ぶ」ではなく、「新聞で学ぶ」もしくは「新聞から学ぶ」スタンスで新聞を扱うこととした。

(2) 記事・テーマ選定の方針

上記(1)を達成するため、記事は難易度、分量ともに、高校1年生にとっては読み応えのあるものを選定することとした。また、思考や考察を深めさせられるよう、モラルジレンマが含まれるものを教材とした。

(3) 対話型授業の重視

新聞記事を個人で読み込んだ後、生徒と担当教員、もしくは生徒同士で対話や熟議、議論をする機会を多く設定した。具体的には、一人では分からないことをグループで解決したり、一人一人が持つユニークな視点をクラスで共有するなど、記事の内容を深く読み込み、考察することを期待した。また、教員が発問したり、生徒の疑問にヒントを与えたりすることで、高校生だけでは到達できない思考や考察を得ることを

目指した。

4 具体的な授業展開とその成果

(1) 前期「社会と自己のつながり」の展開

① 学習のテーマ

「社会の中でどう生きるか ～未来の自分・今の自分～」

② 使用した教材（新聞記事）

「総人口 最大の25万人減」

「外国人上司が普通に」

「動き出す『チーム・グローバル』」

「人材育成こそ成長戦略」

③ 授業展開と成果

いずれの場合も、はじめに個人ワークとして記事の精読を課した。分からない語句を調べ、疑問点を書き出し、データなどのあいまいな部分に気づいた場合はその点も記録するように指導した。

次に、個人ワークを受けて、クラス全体やグループ（4～5人）内での討論を通して、記事への理解や疑問点、様々な視点について共有した。また、他者の疑問について、クラス全員で意見を交換し、ある一定の「答え」を見いだすことも多くあった。生徒は、チームで考えることの強みを体験することができた。

同じ事柄に対する複数記事の見比べも、内容理解を深めるために有用であるとの認識もできた。新聞社ごとのスタンスやデータの相違点等の比較により、一つの事柄に対していろいろな視点を持つことの大切さが理解できた様子だった。

④ 授業展開の課題とその克服

上記のような授業を展開する中で、最も大きな課題が、いかに生徒に発言させ

るか、ということであった。おとなしく、まじめに授業に取り組むが、自分の考えを発言するのは苦手な生徒が多いのは、本校に限らないだろう。

そこで担当者たちは、ロールプレーや問答法ゲームなど必然的に発言しなければならないような様々な手法を考え出した。当初は戸惑っていた生徒たちも、回を重ねるごとに快活に発言するようになっていった。また、その発言からは、記事を理解した上で、自分の考えをしっかりと構築できていることが推察できた。

(2)後期「課題理解の深化」の展開

①テーマ・記事の選定

前期では主に教員主体でテーマや使用する新聞記事の選定を行ったが、後期ではテーマや記事を生徒自身に設定させることを試みた。



新聞を使つてのグループ討論



「テーマ新聞」の発表会

1年次のクラスの枠を越えて、テーマごとに新たな「講座」を編成した。それぞれの講座の大テーマは、「自然科学と人間」「科学技術と生活」「国際社会と日本」「混迷する政治・経済の行方」「少子高齢社会の医療・看護」「環境破壊・環境保全」「教育の過去・未来」である。5人1班となった生徒たちは、それぞれの講座で基礎学習をした後、小テーマを決定し、全く新たな「テーマ新聞」の作成に挑戦した。

②授業展開と成果

筆者が担当した「科学技術と生活」講座では、教員の側で用意した記事を基にまず「新聞記事の構造」について学んだ。これにより、どんな記事が読者にとって読みやすいかが理解できた。他にも、担当教員対生徒でディベート形式の公開討論会を行った講座など、生徒の特性を生かした、講座ごとに裁量ある授業展開がなされた。

5 次年度以降の課題と取り組み

教育現場での教科科目の指導については、学習指導要領や研究授業等により情報交換がなされ、指導内容や指導方法について各担当者間に大きな差が生じないような仕組みがある。また、指導方法や使用教材等については、教員間の日常的な会話の中で情報交換がなされている。NIEの実践についても、担当者により様々な指導上の工夫やその効果について、担当者会議はもちろん日常的な場において情報共有がなされることが、この取り組みの一層の充実に不可欠である。

生徒には新聞の読み込み・考察・熟議を重ね、自分が生きていく将来の社会状況への理解を深めるよう指導している。そして、そのような社会の中で自分がどう生きていくかを考えさせることは非常に重要である。そのため、新聞記事から社会を客観的に考察し、その考察と関連させながら自分の将来の生活（職業、生き方など）を考えていく態度の育成が今後重要である。